

福島国際研究教育機構施設の在り方に関するアドバイザー会議（第1回）議事要旨

日 時：令和5年3月29日（水）10：00～11：55

場 所：中央合同庁舎4号館1214特別会議室

出席委員：上野座長、石井委員、伊藤委員、小堀委員、田中委員、出口委員（Web参加）、
牧委員

※事務局より資料2及び資料3を説明、その後、山崎F-REI理事長予定者から資料4を説明したのち、委員から意見を頂戴した。各委員の主な意見は以下のとおり。

- ・具体的な施設の在り方を考えていく会議の主旨かと思うが、もう少し幅広く、あるいは長期的な考え方に立って考えていくことも重要。
- ・新しい教育研究施設をつくる際、施設の計画やデザインのコンセプトは、その施設で活動を展開する教育研究組織自体の創立の精神に立脚することが重要。F-REIについては「創造的復興」がそれに当たり、その精神がカバーする対象は、浜通り全体がターゲットになることを意識する必要があるのではないか。
- ・建築単体や建築の中身についての議論だけでなく、イノベーションコースト構想の実現に向けて、浜通り全体や浪江地域が今後どういう地域になっていき、そのために本機構や機構の活動拠点となる施設がどのような役割を果たすのかという視点から、施設の在り方を考えていくことも重要。
- ・施設全体、敷地全体のマスタープランの下に、個々の建物の計画、さらに実施設計を考えていく重層的な計画体系を明確にすることが必要。
- ・地域と立地場所の関係を考える上で、町や県の各種計画や人口の状況等の基本的な情報を資料として共有いただきたい。
- ・教育研究施設は永遠に未完成で、社会のニーズの変化に応じながら新しい研究テーマに取り組み続けるためには、必要に応じて、施設をつくり変えていかなければならないという視点も重要。
- ・完璧に造っていけば建築としては成立するが、造れば造るほど逆に孤立していくし、人の動きもなくなるので、いかに「不完全」に造っていくのかという視点も必要。足りないものは町で補えるように、自由で柔軟性を持たせたような造り方を考えることが大事。
- ・施設だけを考えるのではなく、研究・教育活動、地域や企業との連携、それに関わる全ての方々の緊密な交流を支えるための環境を実現するためのキャンパス計画的なことも考えることが必要。

- ・中長期的に見て施設そのものは機能していたとしても、町とのギャップが出てきたり、逆に孤立してしまったりということになるので、町とのつながりや浜通りとのつながり、広域的な視点の中での位置づけを最初から考えていくことが必要。
- ・人は教育で変わるという側面と、環境で人が変わっていくという側面があるため、研究者が創造的な研究ができるかは環境のつくり方に深く関係がある。
- ・発展的・拡張的に施設を造っていく上で、インフラの拡張性をどうしていくか、まずはその方向性を決めるべきではないか。
- ・大部屋は新しい研究をするために重要で、些細なことでも気軽に聞けるので、特に若い方々が研究をする上では非常に有効。
- ・スタッフ機能の充実も重要で、技術スタッフに加えてサポーターティングスタッフや企画スタッフの執務スペースもきちんと考えるべき。
- ・研究者にとって、何らかの公共空間的な場が必要で、町のようなキャンパスになるとか、逆に町をキャンパスのように使うとか、全部お膳立てして造るのではない創造性があるとよい。
- ・人材交流や技術交流としては、オンラインだけではなく、対面で人が会うことが重要なので、この敷地が交流の観点や交通利便性の観点から地域の交通ネットワークの中でどのように位置づけられるのかという点も留意が必要。
- ・ここで活動する人たちがどのような生活を送るのか、ライフスタイルが未だ見えていないので、生活やライフスタイルの観点を議論できればよい。
- ・常に実証実験ができるようなまちの在り方を、このキャンパスの中で同時に実現していくとよいのではないか。例えば遊技施設や食事といったライフスタイルや歴史・文化なども一緒に考えて、それがF-REIとうまくマッチしていくと面白い形ができる。
- ・どこに建てられても同じではいけないもの、ここにしかないものを考えていく上で、例えば浪江で今暮らしている人たちの暮らしや、この地域の歴史や地域的な風土の読み込みにより、地域固有なものを見つけ出す必要があるのではないか。
- ・研究所は公共性の高い場所であるべきで、コミュニティづくりが非常に重要。いろいろな人が自由に入出入りできるような場をつくると、研究員同士だけでなく、いろいろな人とのコミュニティがそこで熟成されるので、設計の途中にコミュニティづくりを一緒に動かすことが大事。
- ・ハードとソフトは常に影響し合う関係なので、同時にデザインしていく必要がある。
- ・都心とローカルの融合も一つのテーマ。例えばいろいろな企業がここで実証実験ができるとか、どこでも車椅子で行けるなどインクルーシブな視点で企業と連携してまちをつくるとか、企業が新出するメリットを感じられるような仕組みと研究テーマを連携させることが重要。

- 完成後も長く施設は残るので、持続可能に運営できるように、インフラのことや維持管理、生活者の環境ということにも思いを巡らせていくことが必要。
- 研究施設は無機質で、ダクトやファンがたくさん見えているというプラント的な要素も拭えないが、そういったものをリジェネラティブ（環境再生型）でマイルドにしていくという視点はこれから必要。
- 水素は合成燃料にも展開できるので、水素を基点にいろいろな考え方で需要と供給をうまくマッチングさせた次世代のキャンパス的な提案ができると夢や希望を持てるし、世界に発信できるキャンパスになっていくのではないかな。
- 建物のゼロエネルギー化を目指すとしても、エネルギーをしっかりと管理するという点は重要。施設完成後のマネジメントや管理の方法と施設の計画をリンクしていかないと継続性は確保できないので、運用をイメージしながら施設をつくっていくことを考えるべき。また、管理する人のスキルや、人為的なミスが起こらないための工夫が重要。
- 今求められる防災性能は、何があろうが使い続けられるということ。特に電気や水は、建築では何とも制御ができないので、災害が起きたときでも何とかできるように備えておくことが考えられてもいいのではないかな。
- 盛土をするなどしてF-REIの施設が水害でやられるというのは避けるべき。
- 東北だけでなく、日本の夢や希望を背負っていけるような施設になると研究者としては非常に期待感もてるのではないかな。世界がこぞって視察に来るような施設を目指して、次世代のキャンパスとしての見え方に注力しなければいけない。
- 研究員だけでなく、スタッフや地域で支える方、将来それを担っていくような子供たち、観光等で来る方々がどのようにF-REIに関わるのか、広い目で一度俯瞰して見たほうがいいのではないかな。
- 研究所は普通の人にはあまりなじみのないところで、何をやっているのか見えないので、若者や女性、子供、障害を持った人たちに何か夢や希望を与えられるような場所になるといいのではないかな。
- F-REIがあることで町の人たちが誇りを持てるような施設になっていくと良い。単に有名な先端研究施設があるというだけではなく、自分を構成する一部になっているくらい関係ができてくると、シビックプライド（自らが関わってこの場所がよくなっているという当事者意識に基づく自負心のようなもの）に結びついていくのではないかな。
- スタンフォードやバークレー、ハーバードといった大学は、かつては全人口のいない田舎にぽつんとできて、そこで研究者の生活が始まって、今はそこ自体がキャンパスタウンになり、かつ世界に研究の成果を発信し続けている。